

神山英「世界とつながるウチナンチュ——異文化と自文化理解へ」
(『歴史地理教育』2017年6月号 pp.34-39)

I はじめに

あなたの住む地域または県で国際的なイベントがあるか知っていますか？

今回紹介するのは、このような国際的なイベントを教材にした社会科第6学年の実践です。

II 実践紹介

神山さんは本授業で目指す児童像を、異文化と自文化・沖縄と世界の関係を「人」を介して探り、多文化共生の在り方を地域から考える子どもとしています。

そのために沖縄で行われている「世界のウチナンチュ大会」を教材化しています。授業においては、児童が単元を通して意欲を持てるように、授業が進むにつれて疑問や調べたい課題が生まれるように構成されています。具体的には大きな3つの発問が設けられています。また、「人」との出会いを大切に、子どもたちに実感を持たせて調べ学習への意欲を高めるように工夫しています。

1つ目：どこの国や地域の人が大会に参加しているの？

⇒大会のDVDを見せることでたくさんの国の国旗や文化を発見させています。

2つ目：参加者はどんな生活をしている？

⇒ここでは児童に調べさせることだけで終わらないように、実際に大会に参加した人を招いて、「人」との出会いを生み出しています。

3つ目：なぜ、大会に参加するの？

⇒沖縄の移民などの歴史的な側面にも触れつつ、大会の開催や経緯、沖縄と世界のつながりについて、ゲストティーチャーに授業をしていただいています。

単元のまとめでは、「世界のウチナンチュ大会」が継続し、広がり続けている理由を考えさせています。この理由を考えていくなかで、多文化共生の意識化を図っています。沖縄の言葉でもって多文化共生への道筋を示して単元を終えています。その言葉とは、ユイマール、チムグクル、イチャリバチョーデー、チャンプルーの4つです。それぞれの意味は、「みんなで助け合って生活していくこと」「人を愛し、大切にしようとする真の心」「出会えばみんな兄弟のように仲良し」「異文化を受け入れ、交ぜながらよりよくする」です。

III 考察

自分が、こういった授業を作るときに参考にしたい点が2つと疑問が1つを述べます。まず、参考にしたいと思った点は、地域の祭りを教材化していることです。地域の祭りを教材化しているからこそ、たくさんの「人」との出会いが生まれ、児童に実感もたれる授業になっていたと思いました。

2つ目はまとめが形式ばっていないことです。自文化である沖縄の言葉を通して、多文化共生への考えを深めていくことは面白いと思います。児童のまとめが単元のまとめとなるような授業を展開できることを目指していきたいと思いました。

最後に疑問に思ったことを述べます。それは、多文化共生といいながら自文化理解に傾いてはいないかということです。まとめとも関わってくることなのですが、沖縄ってすごいといった理解にとどまってしまっているように思えます。多文化共生においては、良いことだけではないはずです。課題などの負の側面も考えさせていくことで、もっと多文化共生について考えることができたのではないかと思うのです。